日本体育大学紀要 26 巻 1 号 (1996) 19-26

日本における女子バレーボールの普及過程に関する研究 (1908-1927)

—女子バレーボールの普及と展開を中心に—

野 上 和 恵*・下谷内勝利*

(平成 8 年 3 月 30 日受付，平成 8 年 7 月 22 日受理)

A Historical Study on the Process of Diffusion of Women's Volleyball in Japan (1908-1927)

—An Analysis of the Process and Development of Women's Volleyball—

Kazue NOGAMI and Katsutoshi SHIMOYACHI

Volleyball was regarded as women sports at the stage when it began spreading in Japan. On the basis of this fact, in this paper, I am going to define the process, from 1908 Volleyball was introduced in Japan, to 1927 the Japan Volleyball Association was founded and it was established systematically.

The following results were obtained:

Volleyball became popular after The Third Far East Championship Tournament were held in Shibaura Tokyo in 1917. However, it was done especially as Women Sports.

In 1923, the victory of Himeji Girls' School on Sixth Far East Championship Tournament that it held in Osaka as exhibition game has brought about sudden diffusion of Volleyball.

The Meiji Shrine Championship Tournament made Women Volleyball spread throughout the nation in 1924.

In 1927, Men Volleyball also began to become popular in earnest, for Japan Volleyball Association was barely established.

1. はじめに

現在，バレーボールは男女問わず競技されている。しかし，長い間日本では女子のためのスポーツとして受けとめられてきた。その理由は，1915（大正 4）年にフランクリン・H・ブラウンによって日本に紹介された時点で，多人数が容易にゲームを楽しむことが可能な，ローテーションを伴わないものであったために，当時の体育指導者の目には「女子に適したスポーツ」に映ったことによる[1]。1917（大正 6）年に東京の芝浦で開催された第 3 回極東選手権競技大会は日本の国民にバレーボールの存在を知らせる機会を与えたが，各地の体育指導者たちはネットによる区分や運動量の少なさなどから，バレーボールが女子の教材には好適なスポーツであるとの感を強めることになったのである[2]。さらに，1923（大正 12）年に大阪で開催された第 6 回極東選手権大会においてエキシビションゲームとして行われた女子バレーボールの試合で日本チームの姫路高女が優勝したことが，女子バレーボールを急激に普及する要因となったといわれている。

ところが，従来の日本における黎明期のバレーボール史研究は，女子を軸にした発達過程に的を絞り，史的な考察を加えているとは言い難い。

そこで本稿ではバレーボールが女子のスポーツとして受容されたことに着目し，1908（明治 41）年に日本に移入されてから，1927（昭和 2）年に日本排球協会の設立を経て，普及・定着するまでの過程を明らかにしようとするものである。

2. バレーボールの普及過程

1) バレーボールの移入

バレーボールは 1895（明治 28）年にアメリカのマサチューセッツ州ホリヨーク市の YMCA 体育主事ウィリ

* 体育史研究室

アム・G・モーガンによって考案されたスポーツである。ために，このスポーツは YMCA の体育指導者によって日本に伝えられることになる。最初にわが国にこのバレーボールを紹介した人物は，マサチューセッツ州スプリングフィールドの国際 YMCA トレーニング・スクールを卒業した大森兵蔵であり，それは 1908（明治41）年のことであった[3]。彼は東京 YMCA の体育部主事として迎えられ，その後長崎 YMCA においても働いている。しかしながら，彼は 1913 年（大正 2）年の第 5 回ストックホルム・オリンピック大会に監督として参加していたが，その帰途，アメリカにおいて死去したために，バレーボール普及に大きく与かることはなかった。

その後，国内においてバレーボールの本格的指導に着手したのはフランクリン・H・ブラウンである。彼は 1913（大正 2）年に日本 YMCA 同盟の名誉体育主事兼，東京 YMCA の名誉体育主事として日本に迎えられた。この年，神田の中華 YMCA においてバレーボールを紹介している。1915（大正 4）年には京都，大阪，神戸 YMCA に紹介し，さらには神戸高等商学校（現神戸大学）の陸上競技部にトレーニングの一環としてバレーボールを指導している[4]。そして，6 月に日比谷公園においても実演を試みている。この模様を「此の競技，中央に網を張り小型の球を身体と手のみにて送り合い勝負を決するものなり」と記されているように，これを見学していた体育指導者たちは「女子に適した体操教材」として認識したようである[5]。

ブラウンは，1914（大正 3）年から 1916（大正 5）年の夏まで関西の諸 YMCA の体育事業指導に出かけている[6]。なかでも比較的設備の整っていた関西地区，特に神戸 YMCA を拠点としてバレーボールなどを指導した。月・金の午後 6 時～7 時半は外国人会員，月・水・金の午後 7 時半～9 時半が日本人会員を対象に指導を行った。さらに週に一度は大阪 YMCA においても指導している。ブラウンが東京 YMCA で活動を開始するのは，1916（大正 5）年の秋ごろからである[7]。この年に京都 YMCA の佐藤金一[8]が芝浦の仮設陸上競技場内の板張コートにおいて，ブラウンにバレーボールを教わっている[9]。ブラウンは 1917（大正 6）年の初夏に東京 YMCA に体育館が完成するまで屋外でバレーボールを指導した。このように当初バレーボールは YMCA 固有のスポーツとして紹介されたため，東京や関西の YMCA を中心として行われているにすぎず，経験者も少ないスポーツであった[10]。

1917（大正 6）年，東京・芝浦において第 3 回極東選手権競技大会が開催されたが，当時の日本のバレーボール界は組織も確立されておらず，競技会を開催したこともなかったことから，チーム編成はこの競技に精通していたブラウンに依頼することになった。このため選手はバレーボールの経験があった京都，大阪，神戸，東京の各 YMCA から選抜された。実際は関西の YMCA を中心としたチーム編成であった。この当時，バレーボールを専門種目として取り組む選手はおらず，陸上競技やバスケットボール競技の選手を兼ねた者がバレーボールの選手として出場した。キャプテンにはバスケットボール競技にも出場する京都 YMCA の佐藤金一が選ばれている。選手達はバレーボールに対する知識が不十分であったために，試合を間近にしてそのルールを研究する有様であった。さらにボールをネット際にあげてスパイクを打つことや，サーブをゲンコツで行っても可能であることを実際の試合で認識する程であった。ゆえに試合結果は惨敗に終わっている。しかし，この大会が YMCA 固有のスポーツであったバレーボールを国内に知らしめる糸口となったことは明白である。それは，当時の東京 YMCA 体育部委員長である近藤茂吉[11]がこの大会について次のように述べていることから知ることができる[12]：

> 日本に於けるバレーボールは未だ生れた許りの幼稚なもので實際は其チームさえ出来て居ない，全く烏合の衆のチームであつた爲め，支那，比律賓選手に對しては，見る影もなく惨敗して了つたが，比惨敗は，却つて日本の運動家の間に多大の刺激と注意を惹いて，爾来其研究と練習は全國各地に普及さるゝ動機を造つた。

また，多田徳雄は『排球競技法』のなかで「この大會が始めて我國民に排球を紹介して呉れた事は何よりの収穫であつた。即ち東京に於ける極東大會の排球戦を見學した多數の我國體育指導者は，競技の實際に，又排球規則に不十分ながらも歸校後生徒に排球を試みるものが僅かながらもあつた事は確かである。著者も大正六年七月徳島に於て當時徳島師範に在職中であつた恩師河津彦四郎氏に始めて排球のコーチを受け，その後小學校教員テイームを編成し試合をした事も度々である」[13]と記述していることからもわかるようにバレーボールを観戦した多数の体育指導者がバレーボールの指導法について十分な知識を持ち合わせていなかった為に，試合を見た印象だけで指導を始めたといわねばなるまい。

さらに，この大会を観戦した体育指導者はバレーボールが女子に適した教材であることを確認している。この

ことについて多田は『アサヒスポーツ』で「然るに大正一五年第三回極東大會が東京芝浦で行はれた時，我國からも男子の一チームが出場して慘敗したのであるが，この時全國からの多数の參觀人の目には女子に最もよい運動であると認められ，甚だしきは男子のなすべき運動ではないと幾分輕蔑した考へをもつていた者もある」と記している[14]。

このように1917（大正6）年に東京・芝浦で開催された第3回極東選手権競技大会はYMCA独自のスポーツであったバレーボールを国民に紹介する機会と多数の体育指導者がこのスポーツを指導する契機をもたらした。そして，さらには多くの人々に女子に好適なスポーツであることも印象づけた。このため，バレーボールは女子の間で好んで実施されるようになるのである。

2）女子バレーボールの普及と展開

バレーボールは第3回極東選手権競技大会によってわが国に広く知られるようになった。1917（大正6）年7月にはこの大会で実施された各競技のルールを解説した『オリンピック競技法』[15]が刊行されており，この本によっても国内に紹介されていったということができよう。

しかしながら，この競技は特に女子のスポーツとして実施されるようになっていった。このことについて多田は『排球競技法』において「女子の排球界は男子の排球界に比較すれば普及の範圍及び程度に於て，技量の進歩の状況に於て，又一般人の理解に於て大に進んでゐる事は何よりよろこばしい事である。而してこれは東京に於ける第三回極東大會にその第一因を發してゐる。即ち第三回極東大會後，男子の方面への排球は極めて少數であり，大正十年まで男子の排球の競技會は全く無かつた程であるが，女子の間には僅かながらもこれを試みるもの各地にあり，大正七年頃から既に府縣單位の小規模の競技會が開かれてゐたのである。従つて相當強いテイームの出現も見聞したものである」[16]と説いている。そして，男子のあいだであまり実施されなかった要因として『大日本體育協會史　上巻』は「大正六年初夏に，芝浦の極東大會で中華と比律賓に大敗した以後，我国の排球は全くの日蔭者の境遇に置かれ，殆んどスポーツ界から忘れられた。同じく世間から閑却せられて篭球が夫でも抑へ難い勃興の熱と力とをひそかに養つて行き進歩の跡を示したのに反し排球は，沈滞の儘，唯日本のスポーツ界から消え失せぬと言う位の程度で，約四ヶ年を閲して，大正十年上海で行はれた第五回の極東大會を迎へたのであつた。大正六年の極東大會後大正十年の第五回の極東大會に至る迄，排球と大日本體育協會が，大正八年の第四回極東大會に参加しなかつたのと，又排球技が他國に比して餘まりに劣勢である爲めに，一般體育界から顧みられなかつたのが其の原因であらう」[17]と説明している。このような理由でバレーボールは「女子のスポーツ」として行われるようなったのである。

1918（大正7）年4月，広島において大阪朝日新聞社広島通信部の主催で女学生の陸上競技大会が開催された。競技種目のなかにはバレーボールも含まれていた。翌年（大正8年）の秋には，大阪毎日新聞社神戸支局主催で兵庫県女子中等学校のバレーボール競技会が開催されている。これが単独のバレーボール競技会の最初である[18]。この競技会は毎年開催され年を追うごとに盛大になっていった。結果として大正10，11年頃には関西地方の女学校のテニスコート全部がバレーボールコートに変化するまでの現象を引き起こしている[19]。このほか地方においても校内で練習や試合を実施したり，競技会が開催されたりしていた[20]。

1921（大正10）年4月，大日本体育協会は第5回極東選手権競技大会（上海）の予選会を実施している。関東地区では東京YMCA，横浜YMCA，東京高等師範学校が出場し，結果東京YMCAが関東代表となっている。いっぽう，関西地区においては神戸高商が，大阪YMCAに勝利して関西代表となった。決勝戦が東京で行われる予定であったが，種々の理由から東京YMCAが日本代表に選抜されている。その理由について近藤茂吉は『運動界』のなかで以下のように述べているので引用しておくことにしたい[21]：

> 従來は此競技の選手は一チームを十六人宛として競技して居たが，對外競技の場合に，かく多數の選手を送る事は費用の上に於ても，選手を集める上にも非常に困難の點が多い，從て今回の第五回極東大會には，十二人（四人宛三側）のチームで競技するやう提議し度いとも思つて居る。而して其選手は出來る限り，バスケットボールと共通の出來るやうな方法を採る事が一番賢い方法だとも考へて居る。

以上のように資金面に生じた問題が大きかったために，バスケットボールの選手と兼用が可能な東京YMCAが日本代表に選抜されたのである。しかしながら，この予選会において神戸高商や東京高等師範学校などの男子チームが単独で出場していることは注目に値するところである。なぜなら，男子においても少なからずバレーボールが実施されはじめたことを物語っているからである。神戸高商は1915（大正4）年にブラウンから

陸上競技部のトレーニングの一環としてバレーボールの指導を受けており，それを契機として学生たちが「バレーボール部」を創設するまでにいたっている[22]。このように男子に対して紹介された時期は早かったにもかかわらず，普及にはいたらなかったのは，指導者の多くがバレーボールを女子に好適のスポーツとして疑わなかったためであろう[23]。

同年5月に上海で開催された第5回極東選手権競技大会の試合結果は惨敗であった。このため大日本体育協会はバレーボールの普及を計る目的で全日本排球選手権大会を11月に開催した。すなわち，協会がバレーボールを男子にも振興させようと乗り出したのである。このことは「男子のスポーツ」としてもバレーボールを認めたことを教えているといえよう。なぜなら，この大会が当初男子のみで実施されているからである。第一回大会は神戸高商と東京，横浜，大阪の各 YMCA チームの4チームの参加のみで，神戸高商が圧倒的な強さで優勝している。神戸高商は，翌年の第2回大会を除いては昭和6年の大会まで連続優勝を成し遂げている。その強さは1920（大正9）年，多田徳雄が神戸高商に赴任したことにあると考えられる。多田は第5回極東選手権競技大会に槍投げの選手として出場し，フィリピンや中華（民国）のバレーボールの戦術を見る機会を得ている[24]。つまり，そこで見た新しいプレーを早速指導に取り入れたことによって，神戸高商は着実に実力を伸ばしていったのである。このことについて多田が「大正十年から昭和五年に至る十ヶ年間の神戸商業大學排球ティームは未だ嘗て國内に於ける他のティームに敗れる事なく常に我排球界の王座を占め，神戸商大と伝へば排球を聯想するまでに認められてゐたのである。これは我國男子排球界不振の際に神戸商大選手が熱心なる練習と研究を續けた賜である。從つて直接に或は間接に我國の排球界の先達となり指導者となり，その貢献する所は甚大である」[25]と述べていることから理解することができよう。

1922（大正12）年4月，第6回極東大会選手権競技大会（大阪）の選手選考を兼ねて第3回全日本排球選手権大会が開催された。多田徳雄監督が率いる神戸高商が代表として選考された。ここに初めて単独のチームによる国際大会出場が実現したのである。試合の結果は大敗であったが，単独チームで出場する利点としては当時の技術を選手達が直に感じとることが出来るようになったこと，その技術を国内に持ち込むことが可能となったことである。このことは，男子のバレーボールを進展させる大きな要因となった。また，この大会では女子バレーボールがエキシビションゲームとして実施された。バーカー婦人率いる上海 YWCA 経営の女子高等師範学校体育科生徒中心のチームが関西代表の姫路高女（多田徳雄が指導）と関東代表の竹早チーム（三橋義雄が指導）に対戦した。上海チームのレベルは必ずしも高いものではなかったが，日本の2チームが上海チームに勝利し，決勝戦は姫路高女が竹早チームを敗り優勝している。全国からきた数万の観衆はこの競技会によって排球が女子に最も適することを認めるとともに，わが国の女子チームの優勝した時期が女子体育を高唱する好機に遭遇したことも手伝って，女子のバレーボールは急激な勢いで普及していくことになる。三橋義雄は『女子競技』のなかで女子の体育の必要性を良妻賢母の見地から説いている[26]：

言う迄もなく體育は獨り青年男子にのみ必要なものではなくて，其の老たると幼きとの別なく，又男女の如何を問はず，等しく實行して以て其の健康なる生活を營む事が大切である。殊に女性を一個の人間としてのみならず，更に進んで子女の母として，其の母の健否が子女の健康に大いなる影響を及ぼし，健康なる母にして始めて健康な子女を産む事實を考える時，母たるべき女子殊に青春の女子は男子よりも一層の奮勵努力，以て體育の實行を圖り，最も健全なる肉體の所有者とならねばならぬ。

『健全なる國民は健康なる母體から生まれる』

と，宜なるかな，ギリシヤの其の昔に於ては男子の體育の盛なりしは伝ふも愚か，女子體育も非常に盛であつた。即ち女子は家族の一分子として家内の雑事を整理するよりも，寧ろ國家の一要素として強健な小兒を産む事を國家に對する重要義務であると考へたのである。是を以て女子は幼時より輕快な服装をし，殆ど男子と同一な運動を練習し，時々，競技會を催して常に身體の強健をはかつたのである。斯の様にして二十歳に達すると始めて結婚し，爾後良妻賢母として家事を整理すると同時に，膽力を練り卑怯未練の行を敢てせぬ事を努めたのである。當時レクルグ氏は『處女をして其の體体を錬磨せしむれば，一は以て後日我等が良妻賢母たる任務を果し得べく，一は以て出産の苦痛を輕減し得べし。』と絶叫したのである。

飜つて我が國に於ける體育状況は如何と考えるに，最近時代の潮流として體育熱が非常な勢で勃興し，殊に女子の運動競技熱の盛になつたことは誠に欣ぶべき傾向である。

このように良妻賢母の視点から体育の重要性を主張

し，さらに三橋は同書においてバレーボールは用具，人数，動作の点から考慮して女子の運動競技として最も適したスポーツとして奨励している[27]。

いっぽう，同年4月には，第6回大会に出場するための関西地区予選会が大阪体育協会主催のもとに開催されている。この大会には実に20チームが出場している。また，6月には大阪毎日新聞社運動および健母会が多田徳雄をコーチとして大阪府下の女学校にバレーボールの巡回指導をしている。この成果は，同年12月2日に大阪毎日新聞主催の第1回女学校バレーボール大会に32組のチームの参加をみたことに現れている。この大会が契機となって女子のバレーボールは益々盛んとなり，府県主催のバレーボール競技会が多く催されるようになった。

関東においては，1922（大正11）年10月12日に大日本体育同志会主催で陸軍戸山学校の運動場において第1回全日本女子選手権競技大会が開催されている。しかしながら，バレーボール競技には東京女子体操音楽学校，東京府女子師範，第二高女，南葛飾高女のわずか4チームの出場であった。また，同月の17日には東京YWCA 主催のもと同じく陸軍戸山学校の運動場において第2回女子競技大会が開かれた。バレーボール競技には東京女子師範と，第二高女の竹早チームと南葛飾高女チームの3チームのみの参加であった。翌年の5月17～18日の両日には大日本体育協会主催のもとに全日本女子選手権バスケットボール・バレーボール大会が催された。遠くからは大阪市岡高女を始めとして，東京府女子師範，東京府立第一高女（2組），日本高女（2組），女子師範卒業生の7チームの参加を得た。特に閑院宮華子女王殿下，伏見宮敦子女王，同知子女王の両殿下の台覧を賜り，非常に盛大に実施されている[28]。このようにバレーボールは関東よりも関西の方が盛んであった。それは1918（大正7）年に大阪朝日新聞社広島通信部が女学校大会の競技種目としてバレーボール競技を，翌年には大阪毎日新聞社神戸支局が女学校排球大会を開催したことが影響しているといえよう。

しかしながら，各府県単位で競技会が実施されるようになるには明治神宮競技大会の開催を待たねばならなかった。

3)　バレーボールの組織化―女子バレーボールの統括組織の誕生―

1924（大正13）年10月，明治神宮競技大会が催された。これは国が開催する国内最大規模の大会であった。ためにその予選会が各地で開かれるようになったのである。これが契機となって女子のバレーボールは全国的に普及するに至った。普及の状況については『運動年鑑』が詳しいので以下に引いておきたい[29]：

一昨年より昨年と各地に於て排球の競技會が多く開かれるやうになつた事は，我国に於て比較的新らしく試みられる此の競技の普及發達のため悦こばしい現象である。これを二三の新聞紙上に現はれたるものを通じて見ても一昨年即ち大正一二年度は四月二十二日の極東大會豫選會に引續いて大毎神戸支局主催の兵庫縣女子，大阪に於ける第六回極東大會の日支比の排球戰及番外として日支の女子排球戰，淡路の女子，岡山縣女子，香川縣女子，大毎主催の關西女子，新潟縣女子，愛媛縣女子，關東女子等の競技會が開かれたが，昨年即ち大正十三年度は尚此の外に愛知縣，朝鮮，滿州，奈良縣，山口縣，廣島縣，長崎縣，静岡縣，埼玉縣，大分縣等に於ても女子競技會が開かれるようになつて來た事は，明かに此運動が日々に普及しつゝある事を物語つてゐるよい實例であると思ふ

又例令其地方に於て競技會が開かれなくとも，現今では氣候温暖なる地方に於ては殆んど何れの女學校に於てもこの競技が行はれない所はなくなつたと云つてよい位迄に進んでゐる。而して其の最も大きい競技會はこれを男女に於ては大日本體育協會が年々主催してゐる全日本排球選手権競技大會で，これは大正十一年より始め關東關西に於て豫選會を開き，最後に東京に於ても参加チーム極めて少数であり，現在はその選手権を神戸高商が獲得してゐるが，これを比律賓及民國チームに比べればその技倆の差は正に大人と子供程であらう。女子に於てはその普及程度は遙かに男子より大であり，各縣に於てこの競技會が開かれるやうな状況であるがその最も権威ある競技會は中央運動社主催の日本女子オリムピツク大會に於ける女子排球戰であらう。参加チーム約二十位であるが，所謂各地猛者揃でその技倆も頗る優れてゐるものが多い。斯くの如く女子が男子に比べて頗る普及し發達してゐるが其原因は第六回極東大會に於て番外として行はれた日本と民國女子の排球戰に日本代表チームの姫路及竹早チームが見事に民國女子軍を破つて優勝した事や，この競技が女子に適する事等によるのである。

この文章からバレーボールが日本のあちこちで実施されている状況が読み取れる。特に大正13年度に女子競技会が著しく増加していることがわかる。そして，それは男子に比べれば女子の間に顕著に現れており，第6回極東選手権大会が起因していると論じている。

このような状況のなかで1925（大正14）年5月，三橋義雄を中心に関東排球協会が，11月には関西排球協会が多田，渡辺，西川等の神戸高商OB中心に設立している。また，同月には第1回関西男子排球選手権大会と第1回関西女子排球選手権大会が実施された。関西排球協会は神戸高商OBを中心として日本のバレーボールのレベルアップに努めたのである。さらに大会の審判やチーム指導，刊行物などによる普及活動もおこなった。

いっぽう，大日本体育協会は1925（大正14）年の組織改造により各競技団体が加盟する組織に変化した。バレーボールは統括団体が存在しなかったため，体協自らが極東選手権大会の予選，選手の選考，派遣等を代行していた。さらに1921（大正10）年以来全日本排球選手権大会も主催していた。ために統括団体の設立が切望されていた。

1926（大正15）年には神戸高商主催の全国中学校排球選手権大会（この年から昭和12年まで続く）が開催された。さらに同年には文部省の学校体操教授要目にバレーボールが加えられ，学校においてもこの競技が実施されるようになった。このことは将来の男子のバレーボールにとっては明るい話題となった。男子のバレーボールが普及しない原因とその将来性について多田は『体育と競技』において次のように語っているので引用しておこう[30]:

我國へ排球が輸入されて既に十數年を輕過してゐるが，その進歩頗る鈍く吾々排球に關係深き者の頗る遺憾とする所である，その原因は色々ある。即ち排球を女子のみ適してゐると解する事がその主なるものであろう。然も輕驗をしないでたゞ皮想の觀察に依て定めてしまうから全く困る。殊に體育指導者のうちに，これがあるのは情けない，今回の比律賓や支那選手の體格をみても知れるが排球の選手位體格のよかつたのはなかつたのである。從つて其のゲーム振りを見ても非常に猛烈であつた。一體我國民には強い運動でないと運動をした心持ちがしないやうに考えてゐるものが澤山ある。又運動は若い青年のなすべきものとのみ心得て在學中は盛んにやつてゐるが學校を出ると全く運動をしない連中が頗る多いがこれが非常な間違いである。又總ての運動に經驗を有し理解をもつてゐる筈の體育指導者がその學生や兒童に體育運動を課すに當り指導者の得手な運動のみ，熱中してゐる實例が頗る多い，甚だしきは新らしい珍しい運動をのみ追い果して體育の眞の理解と根據があるかを疑はれるやうなものもあるが誤れるの甚だしきものである。排球も斯樣な取扱ひを受けて普及しなかつたので吾々には頗る残念に思ふのである。

……中　略……

おくれながらも我國にも一昨年五月文部省は體操教授要目中に排球をくわえられた事は私共の大に悦ぶ所である。これが小學校に行はれ中學校に盛んになれば數年後の我國の排球は頗る強くなるであらう。

この引用からバレーボールが男子に普及しない理由は，これまで女子のみに適していると理解していることのほかに，運動量に問題があること，在学中のみ運動を行っていること，指導者の好みによって運動が選ばれていることがあげられていることが注目されよう。また，学校体操教授要目が与える影響がかなり大きいことが窺われる。

こうして1927（昭和2）年7月31日，ようやく大日本排球協会が設立され，同年10月19日に大日本体育協会に加盟するにいたっている。

以上のように1924（大正13）年10月，明治神宮競技大会を境に女子のバレーボールは全国的に普及していった。そして，学校体操教授要目にバレーボールが加えられたこと，さらに大日本排球協会の設立によって男子のバレーボールも本格的に普及しはじめることになったのである。

3. おわりに―結びにかえて―

これまで論じてきた事柄に若干の所見をまじえてまとめると次のようになろう。

1) 1915（大正4）年6月に日比谷公園においてフランクリン・H・ブラウンによって紹介されたバレーボールは，当時の体育指導者たちの目には「女子に適した体操教材」に写った。
2) そして1917（大正6）年，東京・芝浦で開催された第3回極東選手権競技大会はYMCA固有のバレーボールを国民に紹介する機会をもたらした。多数の体育指導者はこれを契機にこのスポーツを指導しはじめた。ただし，それは「女子のスポーツ」としてであった。ゆえに，バレーボールは特に女子の間で実施されることになった。
3) 1918（大正7）年，大阪朝日新聞社広島通信部が女学校大会の競技としてバレーボール競技を，翌年には大阪毎日新聞社神戸支局が女学校排球大会を開催した。これが影響してバレーボールは関東より関西の方が盛況となった。
4) さらに，1923（大正12）年に大阪で開催された第6

回極東選手権大会においてエキシビションゲームとして行われた女子バレーボールの試合で姫路高女が優勝したことは，女子バレーボールを急激に普及する要因となった。その時期が良妻賢母の見地から女子体育を高唱する好機と重なっていたからである。

5) 1924（大正13）年10月，明治神宮競技大会が催された。この大会は国が開催する国内最大規模のものであった。ゆえにその選考会が各地で開かれるようになった。これが女子のバレーボールを全国的に普及する契機となった。

6) そして，1926（大正15）年に文部省の学校体操教授要目にバレーボールが加えられたこと，1927（昭和2）年7月31日，ようやく大日本排球協会が設立され，同年10月19日に大日本体育協会に加盟したことによって男子のバレーボールも本格的に普及しはじめることになったのである。

このように当初　YMCA　独自のスポーツであったバレーボールは日本において女子のスポーツとして受容された。そして，このスポーツは女子体育を高唱する好機に遭遇したことも手伝って，急激な勢いで普及し，1927（昭和2）年の協会の設立をもってさらに進展したといえよう。

注記および引用参考文献

1) これについて叙述されている代表的な文献は次の通りである．
日本バレーボール協会五十年史編集委員会:『日本バレーボール協会五十年史』(財) 日本バレーボール協会，1982，p. 2.
岸野雄三・多和健雄:『スポーツの技術史』大修館書店，1972，p. 447.
森　玲・はらだみちよ：バスケットボール・バレーボール『サライ』小学館，1995，p. 125.

2) これについては以下の文献で述べられている．
岸野雄三・多和健雄:『スポーツの技術史』大修館書店，1972，448.
日本バレーボール協会五十年史編集委員会:『日本バレーボール協会五十年史』(財) 日本バレーボール協会，1982，p. 2.

3) この説については次の文献を参照されたい．
水谷　豊:『バレーボール』平凡社，1995，p. 174.
日本バレーボール協会:『日本バレーボール協会五十年史』(財) 日本バレーボール協会，1982，p. 2.
奈良常五郎:『日本 YMCA 史』日本 YMCA 同盟，1959年，p. 205.

4) 安村正和:『YMCA 年表』南京都学園，1992，p. 15.

5) これについては以下の文献に記述されている．
水谷　豊:『バレーボール』平凡社，1995，pp. 175–176.
日本バレーボール協会『日本バレーボール協会五十年史』(財) 日本バレーボール協会，1982，p. 2.

6) 奈良常五郎:『日本 YMCA 史』日本 YMCA 同盟，1959，p. 207.

7) ブラウンの初期の活動については以下の文献が詳しいので参照されたい．
日本バスケットボール協会:『バスケットボールの歩み』日本バスケットボール協会，1981，p. 44.
山岸明郎：日本におけるバレーボールの導入と展開『日本大学文理学部研究紀要』第46号，日本大学文理学部人文科学研究所，1993，p. 104.
水谷　豊:『バレーボール』平凡社，1995，p. 176.

8) 佐藤金一は第3回極東選手権競技大会（1917年）のバスケットボールとバレーボール競技に出場し，バレーボールではキャプテンを勤めた人物である．後に八高教授となり，同校のバレーボール部長となる．

9) 日本バレーボール協会五十年史編集委員会:『日本バレーボール協会五十年史』(財) 日本バレーボール協会，1982，p. 2.

10) 山岸明郎：日本におけるバレーボールの導入と展開『日本大学文理学部研究紀要』第46号，日本大学文理学部人文科学研究所，1993，p. 102.

11) 彼は大日本体育協会統制時代にバレーボールの国際的進出に確とした舞台を築くとともに，バレーボールを陰に陽に奨励庇護してきた人物である（大日本體育協會:『大日本體育協會史　上巻』大日本體育協會，1936，p. 451）.

12) 近藤茂吉：バレーボールとバスケットボール『運動界』2月号，1921，p. 63.

13) 多田徳雄:『排球競技法』一成社，1931，p. 57.

14) 多田徳雄：女子のバレーボール『アサヒスポーツ』第5巻第9号，1927，p. 28.

15) 平本直次:『オリンピック競技法』健康堂，1917.

16) 多田徳雄:『排球競技法』一成社，1931年，p. 61.

17) 大日本體育協會:『大日本體育協會史　上巻』大日本體育協會，1936，p. 451.

18) 多田徳雄:『排球競技法』一成社，1931年，p. 57.

19) 多田徳雄：女子のバレーボール『アサヒスポーツ』第5巻第9号1927，p. 28.

20) 多田徳雄:『排球競技法』一成社，1931年，p. 58.

21) 近藤茂吉：バレーボールとバスケットボール『運動界』2月号，1921，p. 64.

22) 安村正和:『YMCA 年表』南京都学園，1992，p. 15.

23) 女子に好適であると記述している文献には以下のものがある．
佐々木等：女子の運動としてのヴォレボール『体育と競技』創刊号，1922年，p. 91.
森悌次郎：ヴォレーボールの基礎練習『体育と競技』7月号，1923年，p. 20.
多田徳雄:『ヴォレーボール』丸善運動具部，

1923, p. 1（諸言）.
出口林次郎:『ハンデバール附ヴォレーボール』（社）日本工人倶楽部出版部, 1928, p. 3.
24) 日本バレーボール協会:『バレーボール』11 月号, 1978 年, p. 28.
25) 多田徳雄:『排球競技法』一成社, 1931 年, p. 60.
26) 三橋義雄:『女子競技』廣文堂書店, 1923, p. 3.
27) 三橋義雄:『女子競技』廣文堂書店, 1924, p. 317.
28) 三橋義雄:『女子競技』廣文堂書店, 1924, pp. 312–317.
29) 朝日新聞社:『運動年鑑』朝日新聞社, 1925 年, pp. 29–30.
30) 多田徳雄:「極東大会に於ける排球」『体育と競技』第 6 巻第 12 号, 1927 年, p. 100.